

## マハディ

ここ、東部油田地帯のアルコバールは三月になると急激に気温が上昇し、日中の気温は二五度を超える。四月、五月となると欧米では猛暑と言って良いほどの気温となる。

六月以降八月までは優に四〇度を超え、時には五〇度以上となりとても外を歩けなくなる。夜でも四二度を下回ることはない。しかも、この間の湿度は一段と高くクーラー無しではとても夜も眠れない。

その代り一月から二月までは気候温暖で快適な過ごし易い季節を楽しめた。欧米人の中には、避寒地に来たみたいだと冗談半分に言うものもいるほどだった。

冬に雪が降るほど寒い南西部の山岳地帯アブハからやってきたばかりのカリムにとっても快適な場所に映った。

「カリム様は恵まれています。こんな良い時期に来られて街

に馴染むことが出来たのですから」

カリムにお茶を淹れながら、侍従のマジドは言った。

「そうだな。爺の言つとおりだ。これもアラアの思し召しに  
違いない」

マジドは幼い頃からカリムの面倒を見てきた。カリムはアルコバールには来なくても良いからと言ったのだが、マジドは聞き入れてくれなかった。父のシェイク・イスマイルもカリムがそう言っても、ただ、笑ってマジドの言つとおりにさせた。この点も兄のスルタンとは違っていた。

スルタンは、侍従が何人もいたせいもあるのだろうか、きっぱりと侍従達の申し出を断り、自分一人でさっさとリヤド、アメリカと生活を続けた。イスマイルもそれを認めた。

カリムはイスマイルから頼りなく見られていたのかも知れないと気にしたくらいだった。良く解釈すれば、マジドがカリムを眼の中に入れても痛くないほど可愛がっていたし、カリムが侍従っ子だったのだらう。

とにかく、カリムは二人で暮らしていた。

「カリム様、今晚はどちらかへお出掛けですか」

「うん、ちよつとした寄り合いに出席してくる。今晚はそれほど遅くならないから心配しなくても良い」

マジドはお目付け役も兼ねていたのだろうが、それほどカリムの行く先などを気にすることはなかった。それでも、カリムは“沙漠のサソリ”の会合に出席する時は、いつも負い目を感じていた。

「統領、私にはサレハが許せません。おめおめと国家警備隊に自首しただけではなく、おまけに恥ずかしげもなく我々に自首するよう呼びかけるのですから。万死に値します」

ナセルは語気を荒げた。

「私も彼を許すことは出来ない。いずれ、地獄に落ちることになるだろう」

カリムは静かにそう応じた。

「内務省が我らの幹部二六人の氏名、写真などを公表出来たのはサレハが協力したからに違いありません」

「うん、そうかもしれないが、治安部隊の捜査も徹底しているし、彼の他に三〇〇人を超える仲間が捕まっている。その中に酷い拷問を受けて喋ったものがいるのかもかもしれない」

ますます感情が昂ぶってゆくナセルに対しカリムは相変わらず静かな口調だった。

ナセル・アブダラー・アル・オタイビーは、沙漠のサソリのリーダーとして新聞などには報道されていた。

ナセルは、一九七九年一月二〇日に起きたアル・ハラム・モスク占拠事件、いわゆるメツカ事件の首謀者の親戚筋にあたる。この事件では、首謀者達は、マハディの指導によりイスラム初期の公正で平等な黄金時代に戻ろうと呼びかけた。この事件制圧には二週間を要し、鎮圧部隊から一二〇名、反乱グループからは一七〇人の死者が出た。

メツカ事件はロイヤルファミリーに深刻な打撃を与え、王家は、墮落していると非難された州知事を交代させるなどの次善策を講じざるを得なくなったほどだった。

また、ナセルの属するオタイバ族は伝統的に反サウジの血

筋で恵まれない部族の一つだった。

「我々を支える人達、命を捨てることを厭わないテロ志願者の数は膨大だし、次から次へと出て来てくれますから、治安部隊、国家警備隊がいかに力を尽くしても追いつかないことでしょう。過去を悔やむより前進あるのみかもしれません」

ナセルは話題を変えた。

この部屋には沙漠のサソリの東部油田地帯幹部二〇人が集まっていた。その内、ナセル以外にサウジ政府の発表した最重要指名手配者リストに載ったものは僅か二人だった。リストには、統領カリムの名は当然含まれていなかったし、黒幕とも言える援助者、資金源、その他重要な関係者の名は明らかにされていない。

ナセルの言っていることは、あながち強がりというわけではなかった。アルカイダ、沙漠のサソリは、サウジ国内で恐ろしいほど膨大な広がりを持っていると言っただけで良かった。

「我々の仲間からは、サウジ治安部隊の攻勢でかなりの犠牲

者が出た。ムハヤ・コンパウンド爆破は大成功だったが、二人の尊い犠牲者が出た。爆破事件のリーダーだったアリも捕まり、治安部隊の急襲で二人が死んだ。それに重ねて言うが三〇〇人を超える仲間が捕まった。我々は、復讐に出なければならぬ」

そう言うとナセルは、二〇人の仲間達の顔を見回した。

「攻撃は最大の防御だ。これから我々は世界を驚かせるような攻撃をしなければならぬ。この国の動脈になっている石油関連施設、関連工業地帯で大規模なテロを起こす。自動車自爆テロは、今や、コンクリートブロックなどセキュリティが格段に向上し実行することが困難になってきた。次の手を考えなければいけない。様々な手口で当局を混乱させよう」

ナセルはいつも話が上手く迫力があつた。アジテーションは一流だった。聞いているものは一様に志気を高め奮い立った。次に彼は何を言うのだろうかと聞き耳を立てている。

「我々は、治安部隊に対し先手、先手を打って行く。彼等の手口を嘲笑ってあげようではないか」

幹部達からはやんやの喝采が起こった。

「これからは、自動車自爆テロの他にも何種類かのテロ攻撃を  
実行する。一つは工業地帯の石油関連施設を狙うものだ。  
これは直接的にはサウジ王政に大きな打撃を与えるものだ  
が、サウジからの石油輸出に影響を与えれば、アメリカ、世  
界経済にも大きな打撃を与えることが出来る。その震度は測  
り知れない。従って、この方面のサウジのセキュリティは極  
めて高い。しかし、必ず盲点はあるものだ、

「その他には、アメリカ人を誘拐し処刑するもの、イラク戦  
争で米国に加担する国々の国民をその場で処刑するものな  
どが思い付く」

ナセルはもう一度促すように周囲を見回した。

これに対し幹部の一人から早速質問が出た。

「リーダーは、米国に加担する国々と言ったが、欧米以外で  
は具体的にどんな国が攻撃対象になりますかね。本部は日本  
を名指していますがそれ以外はどんな国でしょう」

ナセルは即答した。

「例えば、韓国だ。同じアジアの国だろうが、容赦はしない、

「そうそう、それに、イラク戦争で米国に加担する国と言ったが、このイスラムの聖地に十字軍が存在することは許されない。だから、フランスなどは加担していなくとも十字軍であれば許さない。特に軍事関係に従事するもの、石油関係に従事するものは真つ先に処刑する」、

「諸君は情報収集に努めて欲しい。軍事関係、石油関係など基幹産業に貢献する十字軍、イラク多国籍軍加担国の関係者の割り出しとその行動、セキュリティの種類とその抜け穴、地図、建物、家屋の間取図などを徹底的にかき集めてくれ。資金、武器の手配は私を中心に数人でやらせてもらおう」

ナセルはそこで統領カリムを振り返った。

「ナセル、有難う。お前の話はいつも明晰だ。専門家を集める手腕も十分に承知している。さすがに名門アブドルアジズ大王大学の出身だけある」

カリムには人の才能を見抜く力は備わっていた。それがカリムの長所でもあり短所でもあった。短所と言うのは子供の頃から兄スルタンとの差を正確に認識し劣等感に苛まれて



いたからだ。

「統領、有難うございます」

ナセルはカリムが自分の話を認めてくれたのが嬉しかった。誇らしげに前を向いて話を続けた。

「次の我等の大きな目標は、リヤドの同士によるサウジ内務省関連施設への自動車自爆テロだ。このアルコールでは、ヤンブーと連動して外資系石油関連企業の事務所、住居を襲い十字軍の連中を血祭りあげる」、

「彼等の住居は警戒厳重なコンパウンド内だから慎重な攻撃が必要だ。国家警備隊、治安警察、民間の警備会社などが二重、三重の警備を行なっている。タンクも配置されている」、「内通者などを使ってセキュリティ網を突破する」

そこまで言ってナセルはまた一同を見回した。今度は誰も質問するものはいなかった。

「良いか、決して犬死は出来ない。計画に寸分の狂いがあったらならない。勿論、無事、計画が実施出来れば命などは惜

しくはない。また、皆とは天国で会えることになる」、

「今日は、このアルコバールの計画に携わる人選をしたい。私としては、ヤティームのチームに頼みたいと思っているがどうだろう」

ナセルはヤティームに向かって、そう言った。

「リーダー・ナセル様、光栄です。私のチームには攻撃対象企業のIDを持っているものも数名います。事務所のゲートを突破することはそれほど難しいことはありません」

ヤティームという男は得意げに答えた。

「コンパウンド攻撃については、その内部のことを良く知っている私が指揮をとりたいと思っています。二重、三重のセキュリティ網は、それぞれに結構な距離があるのが却って幸いしています。それぞれを上手く通過してゆきます。最も手強いのは、最終ゲートにいる、タンクに乗った治安部隊でしょう。内通者に睡眠薬の入ったお茶でも淹れてもらいましょう。とにかく、奴等はお茶が好きですから・・・」

そう言うと当のヤティームも笑いながらお茶を啜った。

「このアルコバールの計画では、事務所、住宅に侵入するところがポイントだ。そこが自爆テロとは異なる。ヤティームはそれを心得ていてくれるようだ。是非、綿密な行動スケジュール、役割分担を作って報告して欲しい。また、モスレムを殺傷しないよう心掛けることも肝要だ」

ナセルは満足げに喋った。

ヤティームは、ナセルの言葉に頷きながら続けて言った。

「それは承知しています。モスレムを殺傷しないというのは肝要です。しかし、外人の中にはアラビア語を喋りモスレムを装うものもいます。私は前にそれで騙されたことがあります。悔しい思いをしました。今度は、それを冷静に見抜かなければいけませんね」

「そうか、ヤティームにはそんなことがあったのか。それでは、モスレムかそうでないかを見抜くには、どうしたら良いのだろうか。それも前もって話し合って決めておいた方が良

いのではないか」

「私は、コーランの暗誦を聞けば、モスLEMかそうでないかを判断出来る。それが困難な場合、暗誦しているだけでモスLEMと認めてあげても良いのかもしれない」

カリムは、ヤティームにそう提案してみた。

「統領、お言葉、有難うございました。統領らしいご提案で、恐れ入ります。それでは、お言葉に沿いまして、予め、チームで決めさせて頂きます」

カリムが統領としてアルコバルにやってきてから、まだ数ヶ月だったが、既に、皆はカリムを統領として崇めていた。

それがシェイクの血筋というものだ。

天才肌のスルタンに対しカリムは秀才肌だった。カリムは、これまで必死で勉強をしてきた。いわゆるガリ勉タイプだった。そのせいか、身長はスラリと兄のスルタン並みに高かったが痩せぎすだった。幾分、腺病質に見えるくらいだった。ただ、砂漠のサソリの中では、それが禁欲、克己心の塊のように見えて、却って良かったのかもしれない。

「ヤテ टीम、それでは、一度、入念な計画を作成して持つて来てくれ。そこでは、分刻みのスケジュールで参加者の氏名、役割分担を明確にしておいて欲しい。必要資金、武器なども提示して欲しい。今のところ、五月二十九日の早朝を決行時期としておきたい。まだ、決行時期まで三ヶ月以上あるが、時の経つのは早い。宜しく頼む」

ナセルは、屈強な肉体でいつもふてぶてしい態度をとっていた。また、濃いひげが顔中を覆っていて、その間からざらざらと光る鋭い大きな目と濃い眉が覗いてみえた。

最初はひどく取っ付き難く見えるが、皆、接する内に、その内から出てくる優しさに魅かれて行くのだった。

「畏まりました。一週間以内には提出させてもらいます。ヤンブーの仲間達に負けてはられません。彼等は五月一日の決行予定ですから、我々より進んでいるのは当たり前ですが、東部油田地帯の我々は彼等よりより綿密な計画を早めに作成する必要があります」

国家警備隊の制服に身を包んだヤティームは応えた。

「分かっているだろうが、十分に信用できる少数の仲間で詰めることが肝要だ」

ナセルは、ヤティームの顔をじっと見据えた。ヤティームの顔に一瞬緊張が走った。すると、ナセルは、今度は、軽く顎を上げると、その深々とした顎鬚を撫ぜた。

「はい、分かっております。ここのところ、特に、官憲の目が厳しくなってきました。時にはオトリも必要になるかもしれないですね、」

「この間は自爆用車両、爆発物、それに資金まで押収されてしまいました・・・申し訳ありませんでした。今後は充分に注意するつもりであります」

ヤティームはナセルの顔色を窺った。

「うむ、大変結構である」

ナセルは、軽く頷きながら微笑んだ。ヤティームの額には冷や汗が滲んでいた。

「他に何か質問のあるものはないか」

ナセルは幹部一同を見回しながら聞いた。すると、幹部の一人が立ち上がり発言した。

「リーダー、リヤドの仲間達は何故ファイサリア・タワー攻撃計画を進めようとしないのでですか。あそこはキングダム・タワーと並んで、リヤド、いやサウジの象徴になっています。航空機で突入して破壊すれば、その効果は抜群です。交通警察爆破などとは比較になりません」

「確かに、効果は抜群だろうが、本部からの指令だから仕方がない。また、交通警察ではなく、内務省を狙えという話もある。それもその通りだが警備体制には格段の差がある。リヤドはリヤドに任せておくより仕方がない」

急にナセルの歯切れが悪くなった。

「こちらには統領がいらっしゃいます。我々がリードしても良いのではないですか」

その男には、ナセルの眼光も及ばなかった。というよりも、ナセルもその男と同じ意見だったのかもしれない。ナセルは

救いを求めるように統領カリムを振り返った。

「ファイサリア・コンプレックスは、敬虔なモスレムの家系であるファイサル家との係わりが深い。それに、何よりもビン・ラディン・グループが建設に係わった。また、キングダム・タワーはワリド王子の所有だ。ワリド王子は常に多額なザカート(喜捨)を行い人気も高い。効果だけを考えニューヨークと同列に考えるわけには行かない。内務省の建物は確かに警戒嚴重だし、あそこの前は狭く、コンクリートブロックが二重、三重になっている。その手前は、ファハド大通りでお前も知っての通り半地下を走っているので攻撃がし難くなっている。その点、交通警察は、広い通りが真っ直ぐに建物に伸びているので攻撃には格好だ。現段階では、リヤドの仲間達の判断を良しとすべきだろう」

カリムは、いつも通り冷静に発言した。

統領の見解が出れば、それで議論は終息する。しかも、その論理は明快だ。

「統領、ご回答、有難うございました」



質問者は、静かに着席した。

「他に質問はないか」

ナセルは再び聞いたが、今度は質問が無かった。

カリムが自宅に戻ると、侍従のマジドが待ち受けていた。

「カリム様、お帰りなさいませ。お食事はどうなさいますか」

「済ませて来たから不要だ」

「それでは、お茶を淹れて参りましょう」

そう言ってマジドは台所に行った。

いつもの通りのやりとりだったが、カリムは、マジドの振る舞いに違和感があった。それは、長い間の付き合いから自然に分かるものだった。

まさか、マジドがカリムの裏の活動を知る筈はなかった。

カリムはマジドに心配を掛けてはいけないと細心の注意を払っていた。砂漠のサソリの仲間には容赦がない。マジドが何かを掴むようなことがあれば、いとも簡単に殺されてしまう。

沙漠のサソリに共感を持っていようがいまいがそれとは全く関係はない。組織維持のためには必然だ。

「爺、有難う。ところで、爺には、何か気になることがあるのではないか。先ほどから、何か違うと思っている」

「お判りですか。カリム様には全てお見通しです。実は、先ほどアルバハから電話がありました、ファティーマの容態が良くないようなのです」

「何、母上の・・・」

マジドの娘ファティーマは、カリムの父、イスマイルの四番目の妻だった。一番若いのに前から病弱ではあった。

「スルタン様のご紹介で、学生時代からご友人の名医がファティーマを見てくれたのですが、精密検査でガンが見つかったということですよ」

マジドの目には涙が潤んでいた。必死で冷静を装っていたが、カリムには却ってそれが痛々しく写った。

マジドはファティーマがシェイクの妻となってからは自分の娘とは思っていなかった。嫁いだ時点で自分とは身分の

異なるお方になったのだ。カリムは義理の孫になるわけだが、決してそんなふうには考えたことはない。恐れ多いことだった。それは仕きたりでありカリムも十分にそれは心得ていた。あくまでマジドはカリムの爺なのだ。

「見つかった時には末期ガンで手が付けられない状態だったそうです。残念でなりません」

「そうか、なんと・・・手遅れだったのか・・・」

「爺、私は直ぐに帰るわけには行かんが、爺はアルバハに直ぐに戻ってくれ。私のことは一切気にするな。もう、一人で何でも出来る。いつまでも子供ではないぞ」

カリムは、そう言ったが、マジドは暫く考え込んでいた。

「爺、母の父はお前しかいないのだぞ。限りある命と知った今、元の父親に戻ってやれ。遠慮することはない。いや、決して、遠慮してはいけない」

カリムは昔から心優しい子だった。マジドはそんなカリムが好きで堪らなかった。きつと、素晴らしい人間になるに違いないとずっと期待をかけて来た。

マジドはようやくカリムの説得を聞き入れてアルバハに戻って行った。カリムは、これでマジドはフェアティーマの死に目に会えるとホツとしていた。

しかし、カリムは、間もなく、思いもかけない悲しい知らせを受けることになる。

「……爺が自殺をした。何故だ……」

その知らせを受けてカリムは絶句した。

マジドは、アルミナの父イスマイルが身を投げた、あの切り立った崖の上から谷底に向かって身を投げたという。

あの大鷲の舞う霧に包まれた谷底に向かって……

カリムは、自殺の名所と言われている、その光景を鮮明に思い出していた。

連絡をして来たのはスルタンの侍従の一人、ムハンマドだった。父であるシェイクからは何の連絡も無かった。

義母のファティーマは、まだ生きているのだろう。ファティーマが死んだならば、父から連絡があるに違いないからだ。マジドが愛娘ファティーマに会えたことは間違いないかった。抱き合って再会を喜んでいたという。

カリムには自殺の原因がどうしても分からなかった。

ムハンマドは、マジドが自分の命を賭して、神に娘の命乞いをしたのではないかと言っていた。マジドが取り乱して、娘の命が助かるなら自分の命などいらないと叫んでいるのを見たという。

そんな筈はない。いかにマジドが敬虔なモスレムで神に縋ったとしても・・・カリムには納得がいかなかった。

あるいは、あのけじめを尊ぶマジドは、最後の最後まで、ファティーマを自分の元から離れた手の届かない身分のものとして考え、自分を律して、その相克、そして空しさを感じたのではないか・・・いやいや、そんなこともない、マジドは父の許しを得て、ファティーマの看病をしたに違いないと思ひ直したりしていた。

カリムの考えは、堂堂巡りをしていた。

そして、空しさだけが残った。

人の命は何と儚いものだ。

いつしか、カリムの目には涙が潤んでいた。

電話の向こうでは、マジドの遺書をカリムに送ったと言っていたが、カリムはそれを上の空で聞いていた。

数日後にマジドの遺書が手元に届いた。

カリムがその封を切ると、懐かしいマジドの字が一面に並んでいた。決して上手ではなかったが、実直さが表れた字だった。カリムにはそれが遺書のように思えなかった。

カリム様、有難うございました。お蔭様でお母上、ファミリーマ様に会うことが出来ました。こんな幸せなことはありません。大分お痩せにはなっていました。けな気に生きていらっしやいます。私に心配を掛けまいと明るく振舞っていました。まじまじと見ておりますと、心の奥から悲しみが込み上げて参りました。まだ、若いのにとご不憫でなりません

でした。私の命と引き換えにお母上の命をお救い下さいと神様に頼みました。本当に、私は命など惜しいとは思いません。無為に生きております老体がお母上のお役に立つのであれば、即刻、差し上げたいと思っております。

ムハンマドから聞いたようなことが書いてはあったが、相変わらず、それが自殺に繋がるものとは思えなかった。

それから、カリムと暮らした楽しい日々ということが綿々と書いてあった。何かを覚悟したのかもしれないと思えないこともなかった。

そして、次の行(くだり)にカリムの目が釘付けになった。

カリム様、私は存じ上げておりました。カリム様がマハデイであることを・・・衆生を救える方であることを・・・お母上ファティマ様、そして、今度はカリム様が私の手の届かないところに行かれてしまった。

それでも、決して悲しくはありません。長い間、そのようなお方の面倒を見させて頂いた。それだけで幸せなことです。

無上の喜びです。こんな果報者はおりません。是非、この矛盾に満ちた末世に蠢(うごめ)くものをお救い下さい。

カリムの背筋には冷たいものが流れた。マジドは何でもお見通しだったのか。まるで預言者のようだ。カリムはそう思った。

カリムは、マジドの遺書を静かに閉じると、封書に入れ、それを両手に戴いた。

すると、一条の光がその封書に伸び、当り一面を輝かせた。

カリムは、その封書を片手で持ち、もう一方の手に愛用の拳銃、ペレッタM92FSを取り出し、叫んだ。

「爺、安らかに眠ってくれ、私はお前のことを決して忘れはしないぞ。見ておれ、きっとお前の言うように、この世界を救ってやる」

カリムは輝く光の中でペレッタの引き金を引いた。空砲が



部屋中に響き渡った。

やがて、カリムの屋敷に沙漠のサソリの一員がやってきた。

「マハディ・カリム様、私の名は、マスードと言います。宜しくお願い申し上げます。これからは私がマジドに替わって身の回りの世話をさせていただきます」

カリムは、ナセルから話を聞いてはいたが、どうして、彼等がマジドの死を知ったのか、直ぐに、このような迅速な対応が出来たのか訝しく思っていた。

もしかしてマジドの死は彼等と何等かの係わりがあったのかもしれないなどという考えが頭に浮かんだくらいだった。

しかし、そんな筈はないと直ぐに思い直した。恐ろしい、何と恐ろしいことを考えるのだと反省もした。

それは詮無いことだった。これも人の性というものかと自分が卑しくなったりもした。

「カリム様、どうかされましたか。急なことでお驚きですか。リーダーに代わりましてお詫び申し上げます。リーダーは殊の外、カリム様をご心配されています。どうか、遠慮なく何でもお申し付け下さい」

肌が黒く、ぎよろぎよろした目付きのマスードはまるでアフリカ系の黒人のように見えた。本人に言わせれば、生粋のベド(ベドウィン・遊牧民)だという。陽気な性格で常に明るく、若いのにまるで油の切れたロボットのようなぎこちない動きをした。

ナセルは続いて、四人の手下を送り込んできた。

やがて、カリムの屋敷は沙漠のサソリの本部として機能することになる。カリムはますます統領らしくなっていた。今や、マジドの望んでいたマハディそのものだった。

義母ファティーマの死が父から知らされるのは、沙漠のサソリが世界を震撼させることになる大攻勢の直前のことだった。たった、三ヶ月後のことだ。